

aouma

白馬



「正月だというのに、一体俺は、何をしておるのだろう？」

郎等（ろうどう）の清次（きよつぐ）は、うす寒い銀世界の中で雪をこねながら、一人ぼやいた。

雪山を刻む彼の額には汗が浮かんでいるが、手先と足先はじんじんと冷えきっている。

「計算高い清次さまが、まったく、ガキに付合って、こんなところで...」

ぶつぶつと文句をいいながらも、その表情は案外楽しそうである。この男、人の良さとする賢さが同居した、奇妙に味のある表情をしている。

「しかし、春日影（はるひかげ）の姫さんも、雪の馬を拵えろ、とは。何を考えているんだかって、...別になんにも考えてないのか」

思いつきで生きてるからな。あの姫さん。まあ、ガキってのはそんなもんか。しかし、その思いつきに付合っている俺もどうかしてるよなあ...

「清次！」

甲高い少女の声に、清次は振り向いた。

衣を重ね着して着膨れた少女が、覚束ない足取りで雪を踏んで来る。両手に、大きな盆を抱えていて、それを傾けないようにと真剣な様子だ。肩口で綺麗に切り揃えた黒髪が、ゆらゆらと揺れている。

「どうしたんですか、姫君。こんなところまで。乳母（めのと）君に見つかったら俺がまたどやされます。...なに持ってるんです」

丸盆には、笹の葉を耳にした、黒い目の雪兎が乗っている。

「柘植の実をね、目にしたの」

少女は白い息を吐きながら、清次を見上げた。

「お馬の側に置いてもらおうと思って。だって、淋しいでしょう？」

「へえ、じゃ、その兎は、こいつの友達って訳ですか」

「そう」

少女は大真面目に頷いて、清次の後ろにある雪の小山を眩しそうに見上げた。

「凄い。本物のお馬みたいに、大きいのね」

少女の目に、真剣な尊敬の色が浮かぶの見て、清次は焦る。

「いや、本物の馬は、もっと大きいですよ。こんなもんじゃないです」

「でも、凄いわ」

少女は、盆の上に敷いていた布ごと雪の兎を持ち上げると、大事そうにそろりと、地面に下ろした。

「また、次の兎を作ってくるわね」

兎を下ろして身軽になった少女は来た時よりは足早に、来た道に戻っていった。

「気をつけてくださいよ」

後ろ姿に声をかけた清次は、ちんまりと地面に置かれている兎を見つめた。

「本物の、お馬ねえ。...」

彼は、呟いた。

「そこまではいかないけど。...。姫さんの度胆を抜いてやろうか」

清次は、製作途中の雪の塊を振り返った。あの大きな瞳が、驚きをもって輝き、彼の作品を喜

ぶ様子を想像するのは、悪くない気がした。

春日影姫君（はるひかげのひめぎみ）と呼ばれる少女は、内大臣藤原師通（ふじわらもろみち）の娘である。

彼女は祖母に当たる北山の尼君の元に引き取られている。母親は既に世を去っており、父内大臣が彼女に会いにくることは、ここ数年間を通算して只の一度も無かった。それでも祖母君が彼女に淋しい思いをさせまいと気をつけてきた甲斐があって、少女は今の処、明るく元気に育っている。

春日影姫君という名は、春の日差しにも似てうららかに、人の心を和ませる少女に、いつのまにかつけられた通称である。

郎等の清次は、内大臣から遣わされて、女手で細々と暮らしている祖母君の様子を見に、時折この山荘を訪れる。姫君は清次の来訪をいつでも殊の外喜ぶのだが、それは、彼の背後に父親の姿を見ているせいであろう、と清次は推測している。

清次が来る限りは、父内大臣はまだ、自分を忘れてはいないのだ。と、少女は心の頼りにしているようだった。

郎等の清次は、文（ふみ）も寄越さず会いにも来ない、内大臣師通と彼女の間をつなぐ、唯一の細い糸だったのである。

官位も持たない一介の郎等を内大臣の代理と見なさざるを得ない姫君の境遇を、清次は時々、あわれと思う。雪像くらいは作ってやろうと、彼には珍しい親切心を起こしてしまうのも、清次の目に、姫君が見捨てられた子供と映っているせいだった。郎等と内大臣の姫という身分を思えば、途方もなく不遜な感慨ではあるが、現実問題としては、清次の感想は間違いではない。清次は、内大臣という人物の性格を、外ながらに洞察してもいた。したたかに位人臣を極めようと駒を進める内大臣が、淋しく暮らしているこの姫君に情を持っていないことは、まず確実と思われた。

それでも。

と清次は思う。

宮中の泥試合が持ち込まれないこの場所は、ある意味では、楽園であるのかもしれない。と。

…いや。

彼は雪像を作る手を止めた。

楽園だった。…というべきなのかな。もしかすると。

おい。

黒いつぶらな目を持った雪の兎に彼は尋ねてみた。

おまえは、どう思う？

少女の祖母である尼君を頼って、その妹が山荘に身を寄せてきたのは、山の紅葉も艶やかに染まり、秋も深まった頃のことである。

未だ俗世との縁を切っていないその婦人の髪には、幾本かの白い筋が混ざっていたが、今尚それは豊かであり、くるぶし程の長さが充分に残っている。往事の美しさを思わせる上品な佇まいの婦人は、これもまた、一人の孫を手元に連れていた。

賢そうな黒い瞳と、並々ならぬプライドの高さを併せ持っているかに見えるその少年は、名を高仁（たかひと）といった。彼の父は、治天の君として揺るぎない権勢を握る三条院の弟宮で、皇位継承争いの敗北者でもある。

父宮が皇位継承争いに破れていなければ、この少年は、東宮（とうぐう）ともなったであろうとされる人物である。

静かな山荘の生活に、彼は、不穏な空気を持ち込んできた。祖母君に連れられている少年は、姫君よりは年上であるものの、当然まだ初冠（ういこうぶり）前の童姿である。彼が持ち込んだ不穏は無論、政治的なものではないが、この少年が持つ、切れそうにぴりぴりとした雰囲気、のどかだった山荘の空気を緊張させていた。

元々は明るく思いやり深かったという高仁だが、父宮の失脚が彼に与えた影響は大きく、無口で不機嫌で、意地の悪い振る舞いをするようになっていた。

春日影姫君は、彼と仲良くしたいと願っていたが、年が改まっても尚、この気難しい少年は周りと打ち解けず、笑顔を見せることもない。

失脚した父宮の立場もあって、彼を訪れる者は一人も無かった。

少年は半ば、世間から逃れる為に、この山中にやって来たのである。

「清次！」

少女は澄んだ大声を上げて、火桶を抱え込んで着膨れした、郎等の前に転がり込んできた。「姫君。…また乳母君に怒られますよ。いくら幼い方だとはいっても、内大臣の姫君なのですから。姿を軽々しく人前に晒してはなりません」

どう考えても似合わない説教をしている自分がおかしくて、清次の頬はほころんだが、春日影の姫君は、紅潮していた顔を俯かせて、意外な程にしゅんとしてしまう。

「そうよね。はしたないことだわ…」

「え？いえ。あの、そんなに落ち込まれる程のことではありませんよ。ゆくゆく、気をつけていければ宜しいのですから。姫君はまだ、お小さくてあられるのだし」

清次は、先刻とはまるで反対の台詞を、慌てて口にした。こんなことでこの姫君がしゅんとしてしまうなど、今までに無かったのだ。

「いいえ。やはり、本当は、恥ずかしいことなのよね。こうしてばたばたと荒々しい振る舞いをしたり、いつまでも外で遊んだりしているのは。…でも…」

姫君は、俯いてから、気を取り直したように顔を上げた。

「あのね、清次。作ってもらったお馬なのだけど、あれを高仁さまに差し上げてもよくって？」

「構いませんよ。なんですか、そんなことをわざわざ言いいらしたんですか。あれは姫君の馬なんですから、好きに使ってくださいっていいんですよ」

「ありがとう」

と少女は微笑んだ。

「本当はね、あのお馬を高仁さまにご覧にいれようと、思っていたの。とても見事なのですもの、少しはお気も晴れるかもしれないと思って」

「そうですか」

雪の馬を見たくらいで、あの少年の気は晴れるようなものでもないだろうが、まあ、気持ちってもんか。と、清次はうなづく。

「でも、それだと何だか見せびらかすみたいでしょう？差し上げる方が、喜んで頂けるかと思ったの」

姫君は気難しい少年の気持ちを解こうと、一生懸命である。

「ですがそもそも、宮様が、あの雪の馬のところまでお運びくださるんですか？動かすのは、流石に無理ですよ」

「それがね」

少女は嬉しそうに目を輝かせた。

「高仁さまにお馬のことをお話ししたら、御興味を引かれたみたいで、是非見たいと仰るの」

それで喜んで走ってきたのか。…だが……。あの宮さまがそう素直な出方をするとお思えないんだが。

「へえ…。そりゃ、良かったですね」

「そうなの。だから、明日にでも、お目かけようと思うの」

「まあ、あれは、融けますからね。早い内の方がいいには違い無いです」

清次は、少女にそのように、答えておいた。

「あんまりですわ！」

春日影姫君に仕える女童（めのわらわ）のあこやが訴えている。

姫君は、目に涙を溜めて、邸の方に走って戻ってしまった。

残された雪の馬の前には、蹴飛ばされて砕けた雪兎と、女童のあこやと、傲然とした表情の高仁が残されている。

清次は子供達の諍いを、多少離れたところから、監視していた。ガキの喧嘩に手を出す趣味はねえぞ、とりあえず。と、彼は思っている。

雪の馬を素直に喜ぶかねえ？と清次が危惧した通りに、高仁には初めから、姫君の招待を気持ちよく受ける気は無かったようである。

彼はどうやら、この山荘に来てからというもの、何かとうるさくつきまどってくる姫君を今度こそ黙らせてやろうと思って、彼女の誘いにのったらしい。

高仁は、姫君が嬉しそうに案内をしてきた場所で、挨拶がわりに雪兎を蹴り上げたのだ。冷たい調子で、一言。

「わたしに構うな」

と、言っただけ、そこに並べてあった兎を更に踏みつぶした。

今度こそ喜んで貰えるかもしれない。と言う期待があっただけに、姫君のショックは大きく、いつもは明るい姫君も、泣きながら走り去ってしまった。

残されたのは、女童のあこやと、高仁と、それを見守る清次である。

高仁は、面白みのないむっとした顔つきのまま、それでも横目で、清次が作った雪の馬を見上げた。少年の目に称賛の感情が隠されていることが、清次には判った。実際その馬は、諸事器用な清次が姫君を驚かせてやろうと本腰を据えて作ったものであるだけに、非常に見事な出来映えでは、あった。姫君の兎は打ち壊した高仁も、その雪像には、手を出そうとしなかった。

姫君付きの女童のあこやは、毛を逆立てた猫のような気配で高仁を睨み据えている。

「あんまりですわ！」

あこやはもう一度、高仁を詰った。高仁はうるさい何かがいる、という程の目つきで女童を眺めた。

「何様なんですか！あなたはっ！」

姫君付きの女童のあこやは、すっかり頭に血が上った様子で、高仁を怒鳴り付けていた。何様って、宮さまだよ。あこや...。と清次は脇で思うが、口は出さない。この少女は実に怒ると手のつけられないところがあることを、彼はよく知っていた。ひっかかれるのも、つまらない。

高仁は、怒り狂っている風情のあこやを前に、むしろきょとんとしていた。自分に喧嘩を売るような女童になど、彼は今迄出会ったことはなく、そんな者があろうということさえ、想像の外である。

「自分ばかり苦しいみたいな顔をして！」

あこやは言い募った。

「姫君さまが、話しかけてもろくに返事もしないで、無視をして！やっとならぬと思えば、内大臣の姫が、顔をさらしてところ構わず歩き回ってはしたないとか、憎らしいことばかり言って！」

女童はここ数カ月に及ぶ憤懣を爆発させていた。

「姫君さまはお優しいから、それでも仲良くしようとなさっておられたけれど、今度と言う今度は、このなさりようは、一体どうしたことですの！宮さまは、人を踏み付けにして、喜んでおられるみたいですよ！それが身分のある方のされることですかっ！」

「……………」

「宮さまの祖母上さまが頼ってこられたからって、こちらの尼君さまは、むしろ喜んで迎えていらしたけれど、はっきりいえば、働きもしない口が増えた分、こちらとしてはやりくりが大変になります。大事にされて当然みたいに構えられては、腹が立ちますのよ！」

「…あこや」

清次は、流石に割って入った。

「その位にしておけ。宮さまにあまり無礼を働くと首が飛ぶぞ」

「飛ばしておいてくださいませっ！そんなもの！」

清次の脅しの言葉は、女童に一蹴される。

そうかい、そうかい。と、彼は口を噤む。

「どちらが無礼ですか。宮さまだから、なにをされてもいいというのですか！ここにおいでの際に、二度と姫君さまを泣かせてご覧なさいませ、次は絶対にわたくしが許しませんからっ！」

滔々と啖呵を切った後、女童は主人たる姫君の後を追って、憤然と去った。

今度姫君が泣くようなことになれば、あこやは本気で、宮さまをぶん殴るかもしれんなあ。と、清次はその後ろ姿を見送った。

雪像の前には、高仁と清次が残された。

高仁は、呆然としていた。といって良い。

面とむかってあんな啖呵を切つてのける者に、彼は遭遇したことがない。姫君が今迄に示してきた厚意と親切は、彼にも一応、判ってはいたが、素直にそういうものを受け入れられなくなっていた。それでも少年には、二人の少女の反応に触れて、やり過ぎたかな、と自分の行動を後悔している色が見えた。

「父君のお使いが来たって、はしゃいでいるから…」

ため息まじりにぽつりと、彼は呟いた。この山荘で隠れるように籠った暮らしを余儀なくされている高仁に、その言葉が突き刺さったことは、事実でもあったろう。

「御存じとは思いますが」

清次は、静かに言った。

「姫君さまが仰った、父君のお使いとは、わたしのことです。わたしは、一介の郎等にすぎません。このような地下人（じげにん）一人を内大臣の使いとして待っておられる方のお立場がどのようなものか、宮様には、お判りになるでしょう」

少年ははっとしたようだった。彼は父宮の失脚により、否応無しに多くを学んでいる。

「春日影姫君は、いつも笑っておいでですから、のんきに見えるかもしれませんが」

と清次は続ける。

「あの姫君は、他人の苦しい顔を見ると自分も苦しくなるという方です。自分の周りに苦しい顔をしている人がいると放っておけないんですよ。だから、一生懸命相手を助けようとされます。たとえ、及ばないとしてもです。幸せで恵まれていて呑気で余裕があるから、笑っている訳ではありません。もしかすると、むしろその反対かもしれません…。他人の苦しさに気が付くと自分も苦しいってのは、相当生きにくいですよ、このご時世ですからね」

少年は、蹴散らした兎を眺めていた。

「姫君は、宮様にも笑って頂きたかったんですよ。多分ね。御自分がお淋しい暮らしをされていますから、宮様のお立場も身に染みるんでしょう。宮様には、うるさいお節介と感じられたかもしれませんが」

「もう、いい」

と、少年は呟いた。

「その辺の石が喋っていると思ってください。宮様」

清次は続けた。

「古いお味方がいなくなってしまうとしても、また、新しいお味方は、作れるもんです。淋しいことはおありでしょうが、古いものにしがみつくなのは、却って辛いんです。…それは、もう、戻ってはこないんですよ」

「うるさい！」

少年は、清次に拳で殴りかかった。無論、清次にそれは痛くも痒くもない。

滅茶苦茶に拳を振り回している少年の方が、恐らく手を痛めるだろうと思ったが、清次は、高仁を暴れるままにさせておいた。

少年の顔は、涙で歪んでいた。

暴れつかれた高仁はやがて、その顔を隠すように、雪の上に蹲った。清次が近づこうとすると、鋭い声でそれを拒絶した。

「くるな！」

「姫君と、仲直りをしてくださいよ」

云われた通り、傍には寄らないまま、清次はどすのきいた口調で、少年に言い渡す。地下人の清次が、高仁に説教をするなど、とんでもないことである。しかしとにかく、言ってやった方が、踏ん切りってもんはつくわな。と、心の中で清次は呟く。宮様でも、子供は、子供だ。

「わかりましたね？」

清次は言い置いて、高仁を置き去りにした。正確には、少年がそう感じるように、自分の位置を変えた。治天の君たる三条院に縁の宮を一人で戸外に放り出すなど、出来よう筈もない。しかし、高仁には例え錯覚であるにもせよ、今はこうして一人にされることが必要であろうと考えた。

高仁が雪像の前に踞っていた同じ頃、春日影姫君は、これも泣きはらした目をしながら、あこやと共に、小さい指で懸命に庭の薬草園の若菜を摘んでいた。

「明日は、七日だもの」

春日影姫君はあこやに言う。

「お祖母さまに、七草のお粥を召し上がって頂かなくては」

一月の七日には、無病息災を祈って春の七草を入れた粥を食べる。姫君は毎年、祖母君の分の七草を、自分で用意していた。

「でも姫君さま。尼君さまに差し上げる分は、もう充分ですわ。後は私達が致しますから、お部屋にお戻り下さい」

「でも、今年は、人が増えたでしょう？もう少し、摘むわ。皆に良い年を迎えて貰いたいもの」

その増えた人の中には、あの憎らしい高仁さまも数えておられるのでしょうか。...と、あこやは、内心に呟いた。姫君さまは、そういう御方だ。...全く。あんな宮さまのことなんか、放っておけばいいのに。

何となく、気分が晴れないままに、あこやは黙々と薬草を摘んだ。

邸の周りの細々とした仕事も、あこやは良く手伝う。

七草粥の準備を終えた彼女は、夕暮れの薄暗がりの庭先から現れた人物を見て、驚いた。

「高仁さま。どうなさったのですか」

「雪兎の作り方を教えてくれないか」

と、少年は女童に頼んだ。

「それは、構いませんけれど...」

あこやは、怪訝な顔をする。

「壊してしまった分を、戻したいのだ」

それを聞いて、あこやは、鬱々としていた気持ちがほうっと明るくなるような、心地がした。姫君が、どんなに喜ぶだろうか。

「ええ」

と彼女は勢い良くうなずいた。

「ありがとうございます！」

「清次が作ったの？この馬を。...まあ」

器用なのね。

春日影姫君と高仁の後について来た乳母が感心した。

姫君と高仁は、顔を見合わせて笑う。

朝方、例の馬の前には、小さな人ばかりが出来ていた。

朝一番に、高仁が春日影姫君に見せたいものがあるから。と申し入れてきたので、乳母君と、女童のあこやもついて、皆で庭先に出てきたのである。

雪の馬の前には、高仁が打ち壊したよりも数多くの兎が並んでいた。それは前の日に、あこやと高仁が置いたものである。姫君が作っていたのと同じ、黒い柘植の実の目の兎はあこやが。南天の赤い実を目にした兎は高仁が、それぞれに作り上げた。

壊された数よりも多く並んだ雪兎に、姫君は、目を輝かせて喜んだ。

高仁はその様子を見て、清次が寒さをおして雪の馬を作り上げ、あこやが、宮たる自分に向かって啖呵を切った理由が、少し判ったような気がした。彼女がどうして、春日影の姫と呼ばれているのかも。

「それにしても、今日は良い天気なこと」

雪に反射する陽射しに眩しげに手をかざした乳母君は、首を傾げた。

「そういえば、今日は七日ですから、御所（ごしょ）では白馬の節会（あおうまのせちえ）が催されるのですわね。七日に白馬をみると、邪気を払うそうですわ。真似事のように恐れ多いですけど、ありがたいことですわね」

乳母君は、白い息を吐きながら、両手を擦りあわせた。

「さあ。皆さま方。お馬は後でも見られますわ。今はお部屋に戻って、暖かい七草のお粥を頂くことに致しましょう...」

睦月の空は、突き抜けるように、澄んで青かった。

「左大臣（さのおとど）。いかがされましたか」

一月七日。内裏では白馬の節会が行われ、帝より群臣が宴を賜っていた。その席でふと顔を綻ばせた左大臣は、その幸せそうに和らいだ表情を目敏く見とがめられる。

「今年も良い年となりそうだと、思いました」

左大臣源高仁は、無難な受け答えをしつつ、遠い日に、郎等の清次が作り上げた雪馬のことを思い出している。

白馬の節会で、帝のご覧に入れる為に、左右馬寮の役人が紫宸殿（ししんでん）の南庭に引いてくる馬よりも、清次の馬の方が、見事であったと彼は毎年、そう思う。

正月、左大臣の邸では北の方（きたのかた）が決まって、黒い目と、赤い目の雪兎を、女童に作らせている。

「わたくしの作った兎は、どなたかに壊されてしまったのですもの」

と匂やかに微笑みながら、北の方は毎年のように、高仁に言うのだ。

あの年のあの白馬は、自分に何よりの幸運をもたらした。

と、左大臣は思っている。

彼はもう一度、その口元を綻ばせた。